

早稲田大学英文学会  
第 65 回研究発表会

2025 年度

発表要旨集

主 催 早稲田大学 英文学会

期 日 2025 年 12 月 6 日 (土) 13 : 00 より

会 場      早稲田大学戸山キャンパス  
             32号館

お問い合わせ先： [s-kato@aoni.waseda.jp](mailto:s-kato@aoni.waseda.jp)（早稲田大学英文学会事務局）

**Emotion Regulation Among EFL Teachers: A Literature Review and Theoretical Perspective**

文学研究科 修士2年 Zhang Hanruo

In English as a Foreign Language (EFL) teaching, effective emotion regulation is crucial for classroom management and teacher well-being. This literature review and theoretical analysis examine how novice and experienced EFL teachers differ in their emotion-regulation strategies, drawing on Gross's (1998) process model of emotion regulation. Gross's model categorizes strategies as antecedent-focused (e.g., cognitive reappraisal) or response-focused (e.g., expressive suppression). The review highlights career-stage differences: experienced teachers use a more nuanced repertoire of strategies, including flexible "hybrid" approaches, whereas novices rely more on prescriptive methods or direct mentorship. For example, seasoned teachers fluidly "code-switch" between institutional display norms and local cultural expressions, while novices tend to follow set guidelines.

Studies reveal clear career-stage differences: experienced teachers tend to employ a more diverse and flexible set of strategies, including hybrid approaches, whereas novices often depend on prescribed guidelines or mentorship. For instance, seasoned teachers are more adept at "code-switching" between institutional expectations and local cultural norms, while beginners typically adhere to established rules. Cultural context also plays a critical role; in many East Asian educational settings, for example, maintaining harmony makes suppression a normative and often adaptive strategy—serving a relational purpose rather than being purely maladaptive.

Methodologically, recent Q-methodology studies have identified distinct teacher profiles in emotion regulation, grouping individuals based on shared beliefs and strategy patterns. The review shows two key findings: suppression can be useful in certain cultures, and teachers' ability to manage emotions improves with experience. These findings suggest that teacher training programs should acknowledge local emotional norms and promote a flexible, context-sensitive blending of strategies. By integrating Gross's model with cultural and identity perspectives, this study proposes a situated framework for emotion regulation in EFL teaching—one that balances universal psychological principles with local classroom realities. The study's implications can inform culturally responsive teacher education and policy development.

# 研究発表会 発表要旨集

## 第1発表室 (32-225 教室) : 英語教育

笑いから学びへ：

英語のユーモアが高校生の動機づけ、不安、そして教育実践に果たす役割

文学研究科 修士2年 山内 玲次郎

本研究は、日本の高校英語教育におけるユーモアの教育的役割を、混合研究法 (quantitative + qualitative) により実証的に検討したものである。従来の日本の英語教育は文法訳読法と試験対策に重点が置かれ、感情面 (affective factors) やコミュニケーション能力の育成が軽視されてきた。近年、ユーモアは学習者の不安を軽減し、動機づけを高め、教室内の雰囲気改善する要素として注目されている (Neff, 2016; Bell & Pomerantz, 2014)。しかし、日本の高校英語授業においてユーモアを体系的に導入した研究は極めて少ない。そこで本研究は、英語ジョークが高校生の学習動機づけや不安にどのような影響を及ぼすかを明らかにし、ユーモアの教育的活用の可能性を探ることを目的とした。

調査は関東地方の高校2クラス (生徒62名) および英語教員5名を対象に実施した。Neff (2006) のユーモア類型に基づき、①言語的ユーモア、②状況的ユーモア、③攻撃的ユーモアの三分類を設定し、それぞれ4題、計12題の英語ジョークを用いた。生徒は各ジョークを5段階尺度で評価し、授業後に自由記述を行った。また、教員には半構造化インタビューを実施し、ユーモアの教育的効果・リスク・今後の展望に関する意見を収集した。

量的分析の結果、最も高く評価されたのは状況的ユーモア (平均4.00点) であり、理解度・受容度ともに安定していた。一方、言語的ユーモアは語彙力や多義語理解に依存するため難易度が高く、低評価となった。攻撃的ユーモアは賛否が分かれる傾向を示した。

質的分析では、自由記述62件を対象にテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) およびKJ法を適用した結果、(1)情意的関与 (楽しさ・意欲向上)、(2)文化理解、(3)言語意識 (多義語・語用理解)、(4)難しさ、(5)授業評価、(6)自己成長の六つの主要テーマが抽出された。多くの生徒が「英語が楽しくなった」「外国のユーモアの違いに気づいた」と述べ、学習意欲と異文化理解の促進が確認された。また、「ジョークを通して単語の多義性や文脈の重要性を学んだ」との記述も多く、ユーモアが語彙習得や解釈力の発達に寄与する可能性が示唆された。

教員インタビューでは、「動機づけの向上」「語彙学習への効果」「異文化理解の促進」が主な利点として挙げられた。特に「笑いの共有」がクラスの一体感と心理的安全性を高める点は、情意フィルター仮説 (Krashen, 1982) や Willingness to Communicate モデル (MacIntyre et al., 1998) とも整合的であった。一方で、「文化的配慮」や「年齢・発達段階への配慮」の重要性も指摘された。

以上の結果から、英語のユーモアは単なる娯楽ではなく、学習者の感情・認知・文化意識をつなぐ教育的媒介として有効であることが明らかになった。特に状況的ユーモアは、文化的に安全かつ理解しやすい教材として、動機づけ向上と不安低減に貢献する。ユーモアは試験中心の教育に代わる新たな英語教育の方向性を提示するものである。

## 研究発表会 発表要旨集

### 第2発表室 (32-226 教室) : イギリス文学

#### “The Mark on the Wall” における非人間的なものと戦争

文学研究科 博士1年 長南 直弥

昨今の Virginia Woolf 研究では、人文学研究全体で広く展開されている環境批評やポストヒューマンの議論を背景として、作品に反復される非人間的なものの表象への注目が高まっている。第一次世界大戦中に執筆された短編 “The Mark on the Wall” (1917) も近年この観点から論じられ、自然環境に想像的に没入し魚や木に擬態する語り手の思考が、人間中心主義的な世界認識の前提を突き崩すものと解釈されている。本発表は、このような非人間的なものに同一化することへの願望を、エコロジーの問題として独立させるのではなく、戦争というコンテクストを重視して読解することを試みる。

先行研究では、語り手が想像的に没入しようとしている空間が、人間の排除された自然であることはあまり強調されてこなかった。環境批評の代表的論者である Timothy Morton は、人間の外部にある特定可能で原型的な空間という含意を必然的に抱え込む自然という概念は、人間／自然の二項対立を補強することにしかならないと批判する。作品の語り手が夢想するのは、まさにこの Morton が手放すべきだと主張した自然である。そこは広大で、心地よい場所であり、権威的な人間はおらず、人間に対して関心が払われることもない、と語られている。語り手は、外で風に揺れる木が窓を叩く音に気がつき、何にも邪魔されることのない “peaceful” な場所が欲しいと語る。つまり、部屋に閉じこもったまま、その内部空間がそっくりそのまま人間的脅威を決して侵入させることのない自然へと変貌してしまうことが夢想されているのだ。

結末部は、このような自然が排除している脅威が、他でもない進行中の戦争であることを明かしている。つまり、部屋の壁は戦争と自己に距離を設ける防壁なのである。しかし同時に作品は、外部の戦争と内なる思考の境界領域、すなわち両者の間の見えにくい混交をも表現している。Woolf は、自然を暴力からの想像的な避難所として擬装しながらも、戦争を密かに自然の中に混入させているのだ。この点については、戦争が神話的な隠喩で表現されている同時期のエッセイ “Heard on the Downs: The Genesis of Myth” (1916) や、戦争の進行と家主のいない屋敷の荒廃が混交的に記述された *To the Lighthouse* (1927) の第2部 “Time Passes” と比較を試みる。これにより、戦時及び戦後の市民は、人間の世界にも非人間の世界にもくつろぐことはできず、両者の混濁の場所で生きるしかない、という Woolf の認識が浮かび上がるだろう。本発表は、“The Mark on the Wall” の非人間的なものを巡る記述を、戦争に対する防衛的な自閉へ向かいながらもそれに挫折する人間の心理過程を表現したものとして読解することで、Woolf のエコロジーと戦争に対する洞察の絡み合いを提示するものである。

#### 参考文献

Morton, Timothy. *Ecology Without Nature: Rethinking Environmental Aesthetics*. Harvard UP, 2007.

## 研究発表会 発表要旨集

### 第2発表室 (32-226 教室) : イギリス文学

#### 悲劇の再構成としての『サロメ』—オスカー・ワイルドにおける〈愛〉と〈死〉の転化

文学研究科 修士1年 ワングウ ネカ

本発表では、オスカー・ワイルド (Oscar Wilde; 1854–1900) の三つの悲劇作品—『ヴェラ、あるいは虚無主義者たち』 (*Vera; or, The Nihilists*)、『パドヴァ大公妃』 (*The Duchess of Padua*)、『サロメ』 (*Salomé*)—における「愛」と「死」の構造を比較し、その変容の過程を考察したい。ワイルドの悲劇における愛と死の関係については、死を欲望の成就を妨げる断絶として読む見解がある。しかしこの「断絶」は、単なる遮断ではなく、愛の定義そのものを転化させる契機として捉え直すこともできるのではないだろうか。すなわち、登場人物たちは、自らが語る理想的な愛が成立しない状況において、その条件をずらし、死を通じて愛を「別の形で成就している」とも考えられる。

『ヴェラ』と『パドヴァ大公妃』においては、愛する者との結合が直接的には実現しないが、登場人物たちはそれぞれの選択を通じて愛を転化させていく。革命家ヴェラは恋人である皇帝アレクシスを殺さずに自ら命を絶つことで、個人的な愛と祖国への愛を重ねる。また夫を手にかけてベアトリスは、その罪を着せられた恋人グイードを救うために毒薬を飲み、贖罪を果たす。これにより、愛は破壊から救済へと転化されている。両作の悲劇性は、アリストテレス的な *pathos* (苦悩) と *catharsis* (浄化) の構造に支えられており、死によって倫理的秩序の回復が図られている。すなわち、肉体的断絶のもとで精神的な成就が達成される点において、両作品の愛は「語り」と「行為」のずれの中で昇華される。

一方、『サロメ』ではこの構造が大きく反転する。サロメは預言者ヨカナーンの首を手に入れることで肉体的接触を成し遂げるが、その感情に相互性はなく、精神的には断絶されたまま終わる。Julie-Ann Robson は『サロメ』における *pathos* と *catharsis* の欠如を指摘しており、本作を古典的悲劇の限界として捉えているが、ワイルドはむしろこの反転を通じて悲劇の新たな形を試みたのではないだろうか。『サロメ』における「肉体的成就／精神的断絶」は、初期悲劇における「肉体的断絶／精神的成就」と対照的であり、両者の反転は、愛と死の関係を単なる遮断ではなく、変容の契機として提示していると考えたい。

すなわち、『ヴェラ』『パドヴァ大公妃』『サロメ』を通して、ワイルドは「語られる愛」と「行為としての愛」のずれを軸に、肉体と精神、断絶と成就の関係を入れ替えながら、悲劇の効果そのものを再構成している。そこでは、愛と死の結びつきが倫理的秩序の回復ではなく、形式の転化として機能し、悲劇の新たな可能性を切り開いている。本発表では、この反転構造を通じて、ワイルドが古典的悲劇の枠組みの内部でいかに新たな表現を試みたかを明らかにしたい。

**The Self-Appointed Jurors and The Absent Defendant: The Ruin of Hero and Desdemona**

文学研究科 博士1年 桂 詩雨 (GUI, Shiyu)

Shakespeare's *Much Ado about Nothing* and *Othello* both dramatise moments when private emotion is publicly judged, woman's chastity and fidelity are treated as means to measure a man's reputation. Although critics have long examined questions of gender and morality in both plays, less attention has been paid to the forensic aspects of such moral evaluation. This study discusses how accusations are made, arraignments skipped, testimony interpreted, and verdict reached in both plays.

John Langbein notes that the Marian Bail and Committal Statutes, passed in 1555 and 1556 successively, introduced pre-trial examinations to determine whether felony suspects should be granted bail or be imprisoned. Lorna Hutson agrees the pre-trial examination let the jury's role more like 'evaluators of evidence' than 'ethical witnesses'; she further argues that the statutes provided the playwrights with a new narrative framework to represent criminal justice—one that sought to improve criminal investigation and to produce 'truth' before the formal trial. Although this reform emphasised the value of testimony and evidence, the result of a trial was still shaped by collective emotion to some extent in order to reinforce social order. Hero and Desdemona could be the victim of this collective emotion formed by the strict social expectations of gender. Both in *Much Ado* and *Othello*, the male protagonist aligns himself with a patriarchal fraternity which can only be disrupted by the revelation of truth, not by the death of a woman. Kosofsky Sedgwick has shown that a special homosocial desire prevails in any male-dominant society in order to perpetuate patriarchal power; Rebecca Ann Bach also argues that the eighteenth-century textual revision and modern heterosexual-dominant readings often obscure the original significance of this male-male bond—mimicking the bond between man and God, which used to be the most idealised relation that existed for humans. Within this context, marriage functions less as a male and female partnership than as a man-to-man transaction, a social mechanism through which male authority is reproduced and female agency excluded. Hero and Desdemona are judged within a structure that refuses their participation in their own trials; they are interrogated in absentia, and condemned without notice. By framing the act of such moral judgement within non-judicial settings, Shakespeare shows that the unreliability of the testimony derives only from the male. This study examines how *Much Ado* and *Othello* reflect contemporary judicial practices, as well as how forensic reasoning fails when men act as self-appointed jury over the woman.

## 研究発表会 発表要旨集

### 第3発表室 (32-227 教室) : アメリカ文学

#### 喜劇 *The Ritz* にみられるクィアネスの **domestication**—— home と化する **bathhouse**

文学研究科 博士5年 中西 亮介

本発表はテレンス・マクナリー (Terrence McNally) による戯曲 *The Ritz* (1975) を論ずる。1960年代にデビューし、2010年代までそのキャリアを持続させたマクナリーは、その作品の多くで、クィアの市民のアメリカ社会における生活の悲喜こもごもを描き続けた。アメリカ劇壇におけるクィア劇作家の系譜にあって、彼こそは20世紀後半の旗手だ。

彼の先輩にあたるエドワード・オールビー (Edward Albee) や、後進であるトニ・クシュナー (Tony Kushner) などの他のクィアである劇作家と比べた際の、マクナリーの独自性は、クィア市民と社会における家族制度との間にある種々の関係を構築することを目指している点だ、と言える。たとえば、オールビーはその代表作 *Who's Afraid of Virginia Woolf?* (1962) において、細部から滲出するクィアネスに、アメリカにおける核家族制度の根源的な不可能性を示唆させた。これに対し、マクナリーは *Some Men* (2007) において同性婚を含めた、ゲイ市民たちが関係構築を希求してきた約100年の歴史を演劇化した。また *Mothers and Sons* (2014) ではブロードウェイの舞台上に初めて、法的に認められた同性婚のカップルをキャラクターとして登場させた。

しかし彼のこうした試みは初めから成功したわけではない。デビュー作 *And Thing That Go Bump in the Night* (1964) で彼は、家庭劇の中にクィア市民 (ゲイ男性) を登場させたことで観客の非常な反感を買い、ブロードウェイにおける公演は16回で打ち切りとなった。しかし、その後も彼はアメリカの家族を、クィアな視座から描くことへのこだわりを捨てず、家庭トラブルから命を狙われた異性愛男性がゲイの発展場 (**bath house**) へと身を隠すことから始まる喜劇 *The Ritz* において398回のロング・ラン公演と、翌年の映画化という成功を収めた。

クィア市民と家族制度を関係づけようとするマクナリーの試みの到達点を、この喜劇のうちに見出すべきだ。クィアな表象戦略の存在をこの戯曲に措定した場合、特異点は、劇中の大半、主人公の異性愛男性 **Proclo** にとって自身の価値観がひたすらに異化されていく場でしかなかった **bath house** が、実は自身をつけ狙う妻の実家によるファミリー・ビジネスの経営であったことがわかる、その途端に家庭トラブルも一挙に解決する、という異様なあらずじだ。すなわち、この劇においては、オールビーの戯曲群においてしばしばそうであるように、家庭から追放されたりクィアネスが回帰することでその崩壊を招くのではなく、むしろ家庭から隔離されているように見えたクィアネスが、実はもとより家庭のうちにあり、更にはその発見が、崩壊の危機に瀕していた家庭を救うのである。

この物語を広く大衆に認めさせることにマクナリーの狙いがあるとするれば、彼独自のクィアな表象戦略は、ある種のリスクを負ったクィアネスの **domestication** につながる、と考えられる。適宜彼やその周囲の劇作家の作品との比較や、クィア理論の参照を取り混ぜ

**研究発表会 発表要旨集**

**第3発表室 (32-227 教室) : アメリカ文学**

つつ考察したい。

**Balance between Chinese American identity and queer identity in “New Year”**

文学研究科 修士1年 Diao Xiangxuan

Malinda Lo’s short story “New Year” (2018) presents a remarkable balance between Chinese American identity and queer identity. Set in San Francisco’s Chinatown around Chinese New Year’s Eve in 1955, the story follows Lily Ma, a Chinese American teenager who begins to explore her sense of self and sexuality. Early in the story, Lily notices Tommy Andrews at the Chinese restaurant, a male impersonator, who is a female performer who dresses as a man, and becomes deeply intrigued. At the end of the story, when Lily meets Tommy and her girlfriend Lana, she is invited to the Chi-Chi Club, where Tommy performs. Lily’s excitement about visiting the club suggests the beginning of her journey toward queer self-discovery. Meanwhile, Lily’s Aunt Judy returns home to celebrate the Chinese New Year. Judy works for the Jet Propulsion Laboratory and is involved in the United States’ early space program. Lily has always admired her aunt and asks whether she is the only Chinese woman in her lab. Judy replies that she is, but expresses optimism that more Chinese women will follow her path. Aunt Judy once said, when she was a little girl, she never imagined she could have the job she is doing now, helping to build rockets to space. She also mentioned that anything is possible here, especially for Lily, since she is an American citizen, which inspires Lily to believe that she has limitless potential as well.

The story as a whole centers on this theme of potential. As a Chinese American teenage girl exploring her overlapping identities and sexuality, Lily finds encouragement both from her family members and from queer people around her. In contrast to many Asian American queer narratives that emphasize conflict between family and individual, which is reinterpreted, in fact, Asian American queer people are facing more predicaments. “New Year” achieves a gentle balance. Malinda Lo shows this intersection as blurred but full of potential—echoed in Lily’s final line, when a friend teases her about entering the Miss Chinatown beauty pageant and she replies, “Anything is possible.”

**The Mortal's Path to Divinity: Dehumanization in Second-Person Narrative**

文学研究科 博士4年 張 汝楠 (ZHANG, Runan)

*Kil'n People*, written by David Brin in 2002, is a science fiction novel set in a futuristic world where humanity has discovered traces of the soul and developed a technology capable of capturing, replicating, and uploading these traces into clay puppets, known as dittos, which can serve as human substitutes in labor. The protagonist of the novel is a private detective named Albert, and the story unfolds around him and his three dittos. Each chapter features one of these four figures as its focal character, narrated in the first-person voice to construct a limited perspective. However, in the novel's conclusion, a sudden shift occurs as the narrative adopts a second-person perspective, transforming the "real" Albert from a subject into an object.

I argue that the novel's use of first-person narration grants the narrating characters a sense of absolute subjectivity and agency, reinforcing the humanity of the original, human Albert while simultaneously emphasizing and establishing the humanity of the nonhuman ditto Alberts—thus enacting a process of humanization of the nonhuman. Conversely, the sudden adoption of the second-person perspective converts the human Albert from the narrator 'I' into the narratee 'you,' stripping him of narrative authority and consequently diminishing—or even completely negating—his subjectivity. This represents a process of dehumanization.

My presentation will be divided into three parts. In the first part, I will briefly introduce the concept and distinct features of second-person narration. In the second part, I will analyze how the novel transitions from first-person to second-person narration. Finally, I will examine why this shift constitutes a form of dehumanization and argue that such dehumanization is not inherently negative but ultimately leads to affirmative outcomes.

早稲田大学英文学会（文学学術院）  
第65回研究発表会講演会

# 「反アメリカ」という逆説 — エーコからカルヴィーノ、パヴェエーゼへ

講師・・和田忠彦氏（東京外国語大学名誉教授）  
司会・・都甲幸治氏（早稲田大学文学学術院教授）

2025年

12月6日(土)

16:00～17:40 (開場15:30)

一般来聴歓迎

早稲田大学戸山キャンパス  
32号館128教室

